

バードリサーチ ニュース

2013年4月号 Vol.10 No.4



Ficedula narcissina
Photo by Toshifumi Miki

活動報告

この冬は西高東低 ～冬鳥調査の結果から～

植田睦之・平野敏明

今年の冬は低地の公園でヒガラやウソが見られ、冬鳥の当たり年だといわれましたが、「冬鳥アンケート」と「冬鳥ウォッチ」の結果から、北海道など東では鳥が少なく、四国九州など西で多いという傾向がみえてきました。

冬鳥アンケートは98名の方から130件の情報を、冬鳥ウォッチは43名の方から124件の情報をいただきました。ご協力ありがとうございました。

昨年と正反対だったツグミ

昨年の冬はツグミが関東以西の低地で見られなかったことが話題になりました。アンケートの結果、北の地域や山では逆に多く、木の実が豊産だったため北や山から下りてこなかったのではないかと推測されました。一方今年は正反対。北や標高の高い地域で少なかったことがわかりました(図1)。今年は木の実が凶作だったといわれているので、昨年と逆のことがおきていたのかもしれない。

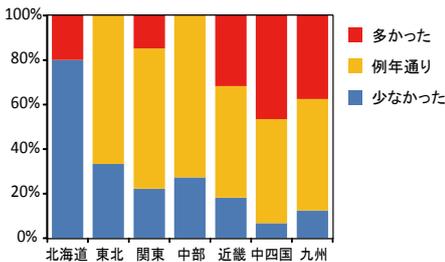


図1. アンケート調査による2012/13年冬のツグミの越冬数の多寡の地理的な分布。北海道や東北など東日本では例年より少なく、近畿以西では多いという結果だった。

ヒガラは山を下りてきた？

他の鳥でも同様の傾向がありました。図2はヒガラとウソの結果です。どのグラフも右肩下がりで、「多い」「普段は越

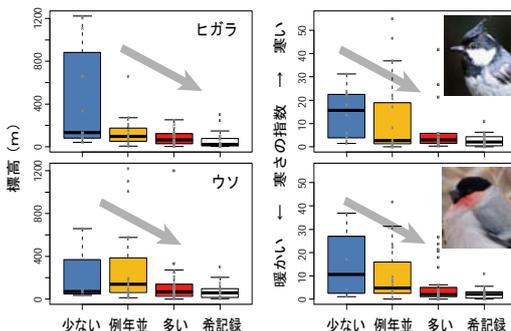


図2. 越冬数の多寡と標高や気候との関係。「希記録」は普段越冬していない場所で越冬した記録を示す。
[Photo by 三木敏史]

冬していないが今年は越冬した」という情報は低標高地や温暖な地域に集中しています。ヒガラは植田のフィールドである標高1200mの秩父の山では例年優占種なのですが、今年はほとんど観察されず、反対に普段いない自宅そばの雑木林で群れで越冬していました。山を離れ低地に下りてきたのだろうかと思像が膨らみます。

アトリも西高東低

越冬数をランクに分けて定量的な情報を収集している「冬鳥ウォッチ」でも、今年の冬鳥が西で多かったことが示されています。アトリは昨年は中部山地帯で200羽以上の群れが観察されましたが、今年中部山地帯で200羽以上の群れはなく、去年は記録のなかった中国、四国、九州で記録されました(図3)。マヒワは北海道などでしか記録されなかった昨年と一転して全国で記録されましたが、大きな群れはあまり記録されませんでした。

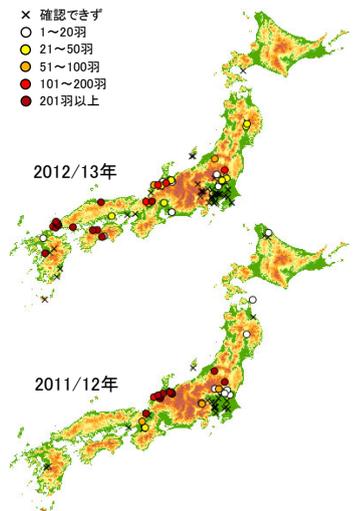


図3. 2012/13年冬と2011/12年冬のアトリの記録状況。

年変動の原因は？

冬鳥の年変動の原因として、木の実の豊凶が考えられます。去年と今年の冬の様子は木の実の豊凶で説明できる部分が多くありそうです。ただ、すべての鳥が木の実を主要な食物としているわけではありません。もう少し情報を蓄積しつつ種子食の鳥、昆虫食の鳥、果実食の鳥といった生態とあわせて検討し、原因を追究していきたいと思えます。また冬鳥ウォッチから、マヒワとアトリの年変動が必ずしも一致しないことがわかってきています。アトリの方が北で繁殖していること、その分布の違いによる繁殖成績の不一致が越冬飛来数の変動の不一致を生んでいるのでしょうか？繁殖地の気象条件の比較や、繁殖地の研究者との交流をとおして検討していきたいと思えます。

■調査結果の詳細はWebに掲載しています。

冬鳥アンケートの結果 bit.ly/110NFfe

冬鳥ウォッチの結果 bit.ly/110Nuk7

レポート

小笠原ヒッチハイクガイド
～種子は海鳥に乗って旅をする～

青山 夕貴子

4月からバードリサーチのスタッフに仲間入りさせていただきました青山夕貴子です。私はこれまで小笠原諸島の海鳥と植物の関係を研究してきました。集団で繁殖する海鳥は繁殖地の生態系に対して大きな影響力を持っています。今回はその一部である「海鳥の種子散布」についてご紹介したいと思います。海で魚をとって暮らしている海鳥も、陸上植物の種子散布の役割を担っているのです。

小笠原諸島は海鳥パラダイス(だった)

2011年に世界自然遺産に登録された小笠原諸島は東京から南へ約1000km、太平洋に浮かぶ亜熱帯の島々です。交通手段は基本的に6日に一便の船のみ。東京・竹芝桟橋から25時間半の船旅を乗り越えると小笠原諸島父島に到着します。

小笠原諸島の在来のほ乳類はオガサワラオオコウモリだけ。小笠原は誕生以来他の陸地とつながったことがなく(そういう島を海洋島といいます)、飛ぶことができない多くの生き物はこの島にたどり着くことができなかったからです。このように捕食者のいない海洋島は、海鳥にとって理想的な繁殖地。そのため小笠原諸島は大規模な海鳥繁殖地となっており、これまでに約20種の海鳥の繁殖が記録されています(図1)(Chiba *et al.* 2007)。ただし現在では、ネコ、ヤギ、ネズミなどの外来ほ乳類の影響で個体数が減っており、繁殖地がなくなってしまう島もあります。



図1. 小笠原の海鳥。上からクロアシアホウドリ、オナガミズナギドリ、アナドリ、カツオドリ。

南硫黄島に侵入した外来植物 犯人は？

南硫黄島という島をご存知でしょうか。小笠原諸島硫黄列島の最南端に位置し、急峻な地形やアクセスの悪さのためこれまで一度も人が居住した歴史がなく、またいかなる外来ほ乳類も記録されていません。世界でも数少ない原生の自然を今に伝える無人島です。2007年、25年ぶりの本格的な学術調査が行われ、前回の調査では記録されなかったシンクリノイガという外来植物(ここで外来植物とは小笠原諸島外から入ってきたものをいいます)が広く分布していることが確認されました(藤田ら 2008)。シンク

リノイガは、トゲトゲの実をつけるいわゆるひっつき虫(図2)。服にしっかりくっついてきてうっとうしい上にシンクリノイガのトゲは鋭く、うっかり触ると本当に痛いので島では嫌われ者です。この嫌われ者を、一体誰がこの無人島に運びこんだのでしょうか。絶海の孤島、南硫黄島に自由に入出入りできたのは誰か？そう、それは海鳥たちです。



図2. シンクリノイガ

海鳥が種子を運ぶ？

鳥は種子散布者として非常に重要であり、鳥に食べてもらう為にさまざまな植物が鮮やかな実をつけ工夫を凝らしていることはよく知られています。しかしそれはあくまで陸鳥の被食散布の話。雑食性の強いカモメ類は植物の実を食べることもあるようですが、その他の海鳥は普通魚食性で種子を食べないので種子散布者としてはほとんど注目されていません。しかしそんな海鳥でも、散布できると考えられる種子があります。付着型種子散布に適した種子、つまり“ひっつき虫”です。

鳥類の被食散布は多くの研究者に注目され、研究成果が積み重ねられていますが、付着散布についてはほとんど研究されていません。海洋島に植物が運ばれる手段のひとつとして、これまでも鳥による付着型種子散布は議論されてきました(Carlquist 1974 など)が、本当に鳥に種子が付着しているかを調べた研究はほとんどなかったのです。調べてもあまりに先行研究が出てこないで、研究を始めたばかりの当時の私はとても不安になりました。本当は鳥に種子なんかついていないんじゃないかと。

海鳥には種子がくっついている！

しかし捕獲調査をして実際に海鳥の羽毛を調べてみて、そんな心配は杞憂であったということが分かりました。クロアシアホウドリ、オナガミズナギドリ、アナドリ、カツオドリの繁殖地で親鳥を捕獲し、羽毛に種子が付着しているかを調べたところ、調査したすべての海鳥の16～32%には種子が付着していたのです(図3, 4)(Aoyama & Kawakami 2012)。海鳥は種子散布者として素質十分であるということが、こうして初めて示されました。



図3. アナドリの羽毛に絡みついたシンクリノイガ

図4. 種子が付着していた個体の割合(%)。Rは繰り返し(同じ日に同じ場所ですべてのものが1)の数、Nは総捕獲個体数。

どんな種子が運ばれる？

図5に捕獲調査によって海鳥の体から種子が検出された植物種を示しました。前述のシンクリノイガはやはり海鳥に多数付着していました。特に付着数の多かった3種を含む4種は外来植物。このように海鳥は外来植物の分布拡大に

レポート

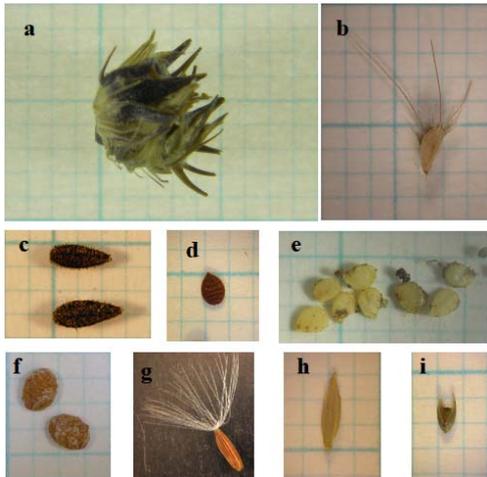


図5. 付着していた種子。()内は付着数。a. シンクリノイガ(23), b. ムラサキヒゲシバ(11), c. ナハカノコソウ(13), d. カタバミ(11), e. イヌホオズキ(10), f. カラクサナズナ(2), g. オニタビラコ(1), h. ハハキメヒシバ(1), i. フタシベネズミノオ(1)。

寄与しているということが強く示唆されました。

また、一般に付着散布型とは考えられていなかった種子も海鳥に付着していました。たとえばイヌホオズキ。黒い果実をつける、誰が見ても被食散布型の植物です。実際にヒヨドリなどの糞からも見つかっています(Kawakami *et al.* 2009)。果肉のない状態で海鳥の羽毛の中にまぎれていました。おそらく果実が海鳥の体に押しつぶされるなどした後、果肉が粘着物質となって種子が羽毛に付着したのではないかと考えられます。このように果肉をもつ種子も海鳥によって付着散布される可能性があることがわかりました。

カタバミやカラクサナズナの種子は何らかの散布に適した器官を特にもっていませんが、いずれも2mm以下の小さな種子です。これらの種子はただ小さいという理由で羽毛に紛れこむことが可能なのでしょう。またカタバミは、触ってみたことがある方もいると思いますが、成熟した果実に動物が触れると自ら種子をはじき出すという性質を持っています。これは自動散布と呼ばれ、1m程度の距離の散布に役立っているといわれていますが、むしろ付着による動物散布に適した性質なのかもしれません。

またオニタビラコはタンポポのように冠毛をもつ風散布種子。冠毛は風にとばされるだけでなく付着にも役立っているのかもしれません。

このように海鳥は案外色々な植物の種子を散布しているようです。捕獲数を増やせばおそらくもっと植物の種数も増えるでしょう。まだまとめられていませんが、その後の調査でここに挙げた以外の植物の種子も見つかっています。

海鳥散布は珍しい？

繁殖地を歩いていると、一面コウライシバの草地なのになぜか海鳥の巣穴のそばにだけ違う植物が生えていることがあります(図6)。



図6. 一面コウライシバの草地だが、オナガミズナグドリの巣穴の入り口にだけナハカノコソウが生えている。

捕獲調査で付着数が多かった植物の小笠原諸島での分布を調べたところ、特にシンクリノイガやナハカノコソウでは海鳥の繁殖分布と顕著な相関がみられました。日本列島から小笠原諸島のような長距

離の種子散布はごく稀にしかおこらないイベントだと考えられますが、小笠原諸島内の島間移動ぐらいならしょっちゅうおこっているありふれた出来事なのではないかと考えています。種子散布者としては影が薄かった海鳥ですが、小笠原諸島のようにもともと島間の生物の交流が少ない島しょ生態系では重要な種子散布者なのではないでしょうか。

外来植物の分布拡大防止のために

シンクリノイガが見つかったとはいえ、他の島と比べると南硫黄島の外来種数は圧倒的な少なさです。南硫黄島は最後の砦。侵してはならない聖域です。2007年に行われた学術調査でも、非常に綿密な外来種対策がとられました。島に持ち込む物は可能な限り新品を用意し、そうでないものは一度冷凍するなどにかく外来種を持ち込まないための細心の注意が払われました。しかし海鳥は？ノーチェックで、外来植物を体にくっつけたまま、いとも簡単に南硫黄島に入ってしまう。なにしろ彼らにとって南硫黄島は何も特別なところではなく、仲間がたくさんいるところ、渋谷のセンター街みたいなものなのです。南硫黄島だけでなく、原生の自然が多く残る島ほど、海鳥の出入りは多いものです。

また現在小笠原の海鳥の分布は拡大傾向にあります。乱獲や外来ほ乳類の影響で小笠原諸島の多くの島では海鳥個体群が縮小または消滅してしまいましたが、近年の外来ほ乳類対策によっていくつかの海鳥種は順調に繁殖分布を広げています。それ自体は望ましいことですが、実際にいくつかの新規繁殖地でこれまでになかったシンクリノイガが観察されるようになりました。

今回の研究成果から、付着散布型の種子だけが海鳥によって散布されるわけではないことがわかりました。南硫黄島をはじめ小笠原の無人島でこれ以上外来植物が増えないように、海鳥に散布されうる種子をもつ外来植物を海鳥の繁殖地に入れないといった対策が必要です。

ここまで海鳥を外来植物を散布する悪者のように扱ってきましたが、海鳥が散布するのは外来植物だけではありません。というより、海鳥の種子散布は、もともとは小笠原の生態系にとって重要な機能のひとつであったはずで、小笠原にとって海鳥はなくてはならないもの。うまく付き合っていくことが重要です。

引用文献

- Aoyama, Y. & Kawakami, K. 2012. Seabirds as adhesive seed dispersers of alien and native plants in the oceanic Ogasawara Islands, Japan. *Biodivers. Conserv.* 21: 2787-2801.
- Carlquist, S. 1974. *Island biology*. Columbia University Press, New York.
- Chiba, H. Kawakami, K. Suzuki, H. Horikoshi, K. 2007. The distribution of seabirds in the Bonin Islands, Southern Japan. *J. Yamashina Inst. Ornithol.* 39: 1-17.
- 藤田卓・高山浩司・朱宮丈晴・加藤英寿. 2008. 南硫黄島の維管束植物相. *小笠原研究* 33: 49-62.
- Kawakami, K. Mizusawa, L. Higuchi, H. 2009. Re-established mutualism in a seed-dispersal system consisting of native and introduced birds and plants on the Bonin Islands, Japan. *Ecol. Res.* 24: 741-748.

スズガモ 英: Greater Scaup 学: *Aythya marila*

1. 分類と形態

分類: カモ目 カモ科

全長:	♂ 435-465mm	♀ 400-455mm
翼長:	♂ 219-237mm	♀ 211-215mm
尾長:	♂ 52-61mm	♀ 51-60mm
嘴峰長:	♂ 41-47mm	♀ 40-45mm
ふ蹠長:	♂ 38-42mm	♀ 37-41mm
体重:	♂ 744-1372g	♀ 690-1312g

※全長は黒田(1939), その他はCramp & Simmons(1977)による。体重は冬期に増加する傾向がある。

羽色:

オスの頭部から頸、胸は黒色で頬に緑色の光沢がある。背と肩羽は白地に黒色の虫食い斑が入る。脇から腹は白色。翼上面は暗褐色で白色の翼帯が目立つ。翼下面は淡灰色。上尾筒と下尾筒、尾は黒色。メスは全体に褐色味が強い。頭部から頸、胸は茶褐色で嘴基部に円形の白色斑、頬に淡褐色の不明瞭な斑がある。肩羽から翼上面は暗褐色で白色の翼帯が目立つ。翼下面は淡灰色。腹は白色で脇から下尾筒、尾にかけて褐色。雌雄とも嘴は青灰色で、嘴爪付近が黒色。虹彩は黄色。脚は灰色。



写真1. スズガモのオス(左)とメス(右)。

鳴き声:

オスは「ククー」と静かに鳴き、メスは「クルル、クルル」と鳴く(清棲 1952)。オスの鳴声は求愛ディスプレイを行う際によく聞かれる。声がとても小さいため、近距離でなければ聞くことは難しい。

2. 分布と生息環境

分布:

繁殖地は北アメリカとユーラシア大陸の北部で、越冬期は北アメリカ沿岸部、北西ヨーロッパ、カスピ海、黒海、東シナ海、黄海沿岸、日本などに移動する。国内では全国で越冬し、特に東京湾(千葉県、東京都)や諫早湾(長崎県)、三河湾(愛知県)などの内湾、宍道湖(島根県)などの個体数が多い。

生息環境:

繁殖期は亜北極圏のツンドラや開けた針葉樹林にある小さな浅い池などに生息する。越冬期は主に海岸に生息し(写真2)、水深の浅い内湾や河口、沿岸部のほか、内陸の大きな湖沼でも見られる。河口域では上流側に少なく、海上側に多く生息する傾向がある(嶋田・桑原 1995)。



写真2. 海上に浮かぶスズガモの群れ。

3. 生活史

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
繁殖システム:	非繁殖期			繁殖期			渡り					

単独か少数のグループで繁殖する。コロニー性ではないが、巣間距離が1m以内になることもある。

巣:

よく茂った草地や低木林の地上に営巣する。造巣はメスが行う。巣の外径は25~30cm、内径18cm、高さ17cm。巢材には枯草が用いられ、産座に羽毛が敷き詰められる。

卵:

卵は長径55~68mm、短径41~48mm、平均62×43mm、重さは平均61g。色はオリーブグレーで無斑。一腹卵数は通常8~11個。

抱卵・育雛期間、巣立ち率:

抱卵はメスだけで行い、26~28日で孵化する。育雛期間は40~45日。カナダにおける調査では、孵化率は年によって8.4~53.5%と変動が大きく、孵化した雛の巣立ち率は28.1~53.5%であった(Tatman *et al.* 2009)。

渡り:

春期、越冬地からの渡りは2月下旬から始まり、3月中旬頃から本格化する。4月中旬まで越冬地に留まる個体も見られる。繁殖地に到着するのは5月後半から6月初旬とされる。亜成鳥は繁殖地に移動せず、越冬地や中継地に留まる。秋期の渡りは8月中旬~9月初旬から始まり、9月中下旬に本格化する。越冬地には10月中下旬から渡来する。鳥類標識調査の結果、国内で放鳥されたスズガモの回収記録は、ヤクート、マガダン、サハリンなどの極東ロシアから得られている。

4. 食性と採食行動

水深0.5~3.5m、稀に7mまでの潜水を行い採食する(写真3)。雑食性で、主に貝類を採食するほか、昆虫、甲殻類、環形動物、魚類、植物の根、種子、水草などを食べる。デンマークにおける調査では胃内容物の80~95%がヨーロッパイガイと報告されている(del Hoyo *et al.* 1992)。千葉県市川市・船橋市沖の三番瀬では、主にアサリとホトギスガイを採食していることが胃内容物調査により確認されている(千葉県土木部・千葉県企業庁 1998)。



写真3. 潜水するスズガモ(上)と浮上し水面で二枚貝を飲み込むスズガモ。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● スズガモは東京湾のどこにいる?

東京湾は国内有数のスズガモの越冬地であるが、湾全域にいるのではなく、個体数が多い場所は湾奥~木更津

側の岸沿いで、神奈川県～東京都境の多摩川河口、葛西沖、千葉県船橋市～市川市の三番瀬、千葉市の幕張沖、木更津市の盤洲干潟、富津市の富津岬などの地域には、数千～数万羽規模の渡来地が点在している(環境省自然環境局 2013)。では、岸から見えない湾の中央部分はどうだろうか？東京湾を横断するフェリー航路でカウント調査を実施したところ、スズガモは川崎側と木更津側の沿岸部に多く、湾の中央部にはあまり出現しなかった(図1)。スズガモは沿岸部の浅瀬に依存しているため、水深の深い湾中央部には少ないと考えられる(箕輪ら 1999)。

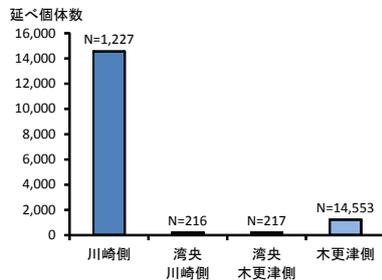


図1. 川崎～木更津間のフェリー航路におけるスズガモの延べ出現個体数。1991年5月から1993年2月までの記録(箕輪ら 1999)。川崎側に比べ木更津側が少ないのは狩猟圧が影響していると考えられる。

● 正確な数はわかっていない？

国内におけるスズガモの個体数について、環境省が毎年1月に実施する全国調査などの結果が公表されている。近年では全国で20万羽前後が記録されている(図2)。水鳥類の個体数調査は岸辺から望遠鏡や双眼鏡で観察し、個体数が多い場合は計数器(カウンター)を使用する。しかし、岸からの距離が遠い場合や波立つ海上で個体数を数えるのは難しい。群れが1万羽を超える規模になると、1羽ずつ数えながら計数器を押し続けることは極めて困難となる(松田 1985)。そのため、スズガモの大きな群れは概数で記録されることが多いと考えられる。

調査の精度を上げるため、これまでも計数器以外の方法でスズガモを数える方法が検討されてきた。例えば蓮尾(1986)は行徳野鳥観察舎(3階建)の屋上から群れをパノラマ撮影し、その画像をもとにメッシュを区切り個体数を推定する方法を紹介している。この方法を用いるには、群れを見下ろす撮影場所の確保が条件となる。また、航空機を利用して上空から群れを連続撮影する方法も試みられている(神崎ら 1998)。この方法では写真から1羽1羽を数える事が可能であり、地上からは分りにくい群れの位置や形状まで正確に知ることができる。一方で、海面の反射や波が写真に写り込むことで鳥を認識しづらくなったり、航空機に驚いたスズガモが飛び立ってしまうなどの課題も指摘されている。

モニタリング調査では特殊な機器を使うわけには行かず、見通しの良い岸辺から

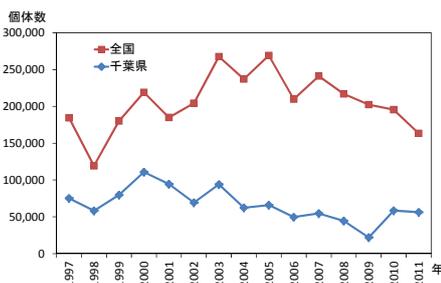


図2. 全国と千葉県におけるスズガモの個体数変動。環境省自然環境局(2013)を基に作図した。

望遠鏡で数えるのが現実的である。三番瀬など港湾部の生息地では、船舶が往来する航路や滞筋などをスズガモが避けて分布するため(写真4)、ある程度のまとまりに分かれる傾向がある。このような場所で調査する場合、海上にある目標物を事前に調べておけば、数えた群れの位置を特定することができ、ひいてはカウントの重複や漏れの軽減に繋がる。航路の位置や標識、灯台、海底地形などの情報が記載された海の地図、「海図」を用いることは調査の精度を上げるための一助となるだろう。



写真4. 航路を避けて休むスズガモ(手前)。左側水面に浮かぶ緑色の航路標識が航路の位置を示している。

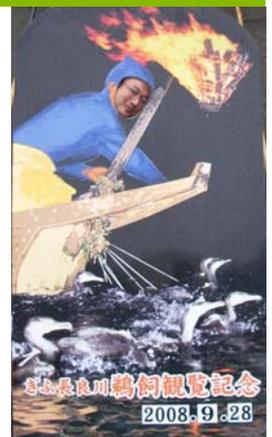
6. 引用・参考文献

千葉県土木部・千葉県企業庁. 1998. 市川市二期地区・京葉港二期地区計画に係る環境の現況について(要約版).
 Cramp S. & Simmons K.E.L. (eds.). 1977. Handbook of the birds of Europe, the Middle East and Africa. The birds of the western Palearctic, vol. 1: Ostriches to Ducks. Oxford University Press, Oxford.
 del Hoyo, J, Elliott, A & Sargatal, J (eds.). 1992. Handbook of the Birds of the World. Vol.1: Ostrich to Ducks. Lynx Edicions, Barcelona.
 蓮尾純子. 1986. スズガモの数え方. 行徳野鳥観察舎友の会編. よみがえれ新浜. pp. 136-137. ふたば工房.
 環境省自然環境局. 2013. 第43回ガンカモ類の生息調査報告書(平成23年度). 環境省自然環境局野生生物課, 東京.
 神崎高歩・箕輪義隆・矢作英三・佐藤浩二. 1998. 航空写真をもちいたスズガモの個体数調査方法の検討. Strix 16: 143-147.
 清棲幸保. 1952. 日本鳥類大図鑑Ⅱ. 講談社, 東京.
 黒田長禮. 1939. 雁と鴨. 修教社書院, 東京.
 松田道生. 1985. 野鳥の調査 バードカウント入門. 東洋館出版社, 東京.
 箕輪義隆・桑原和之・嶋田哲郎. 1999. 東京湾海上の鳥類相. Strix 17: 31-41.
 嶋田哲郎・桑原和之. 1997. 千葉県市原市養老川河口域におけるホシハジロとスズガモの分布. Strix 15: 83-88.
 Tatman, N.M., McRoberts, J.T., Smith, W.A., Ballard, W.B., Kehoe, F.P. & Dilworth, T.G. 2009. Nest success and duckling survival of Greater Scaup *Aythya marila* at Grassy Island, New Brunswick. Canadian Field-Naturalist 123(4): 323-328.
 山階鳥類研究所. 2002. 鳥類アトラス. 環境省, 東京.

執筆者

箕輪義隆 千葉市野鳥の会

学生時代の研究テーマは植物のコスモスで、顕微鏡を覗いて花粉を数えていました。今は千葉県の干潟や湿地で鳥を数えています。春から夏にかけてコアジサシの観察を続けていますが、近年埋立地の開発が進み、繁殖するコアジサシも空地も激減してしまいました。かつて人工海岸にあった繁殖地の復活を目指して、コアジサシの動向に一喜一憂しています。本業はイラストレーターで、鳥の絵を描いています。



図書紹介

鳥類学者 無謀にも恐竜を語る

川上和人 著 / 技術評論社 定価 1880円(税別)



ぼくも子供のころは恐竜の研究に憧れました。しかし、なかなか身近にそういった環境はなく、いつしか虫を見るようになり、そして鳥の世界で仕事をするようになりました。この本で川上さんは言います。「鳥類は恐竜だ。したがって鳥類学者はすなわち恐竜学者だ」ぼくも知らず知らずのうち幼き頃の夢をかなえていたことに気付きました。

恐竜学者にはできなくて鳥類学者にできる最大の強みは、生きている現物を観察できることです。そこで本書で「恐竜学者」の川上さんが試みているのが鳥の生態調査の知見を通して恐竜の色や生態などを推定しようということ

す。その推定には、ぼくの場合で「そうそう」と思うものもあれば、「違うんでないの」と思うものもあります。たとえぼくが「そうそう」と思っても、もちろんそれが正しいとは限らず、多くは妄想にすぎないのかもしれない。しかし研究は妄想が生み、思い込みが育てるものです。この本がもとになって、恐竜学の新たな定説がうまれるのではと期待してしまいますし、鳥に関わる者としては単純に面白く読むことができ、恐竜の見方を学ばせてもらいました。

また本書をおもしろくしているのは川上さんならではの「たとえ話」です。多くはそれでわかりやすくなっているけど、逆にわかり難くなっているのも少なくないような…。でも今が旬のノニドネアのKO率でさえも65%なので、これだけわかりやすくなっていれば上々ですかね(ぼくの例え話の方がわかり難いですね)。【植田睦之】

新人スタッフ紹介

青山夕貴子

大学3年の頃の実習で小笠原諸島を訪れ、その自然に感動したのがきっかけで、大学院では小笠原で海鳥の研究をしました。海鳥と生態系のかかわり、特に繁殖地植生への影響について研究していました(今号のレポートでご紹介させていただいております。ご参照ください)。対象にしてきたのはカツオドリ、クロアシアホウドリ、オナガミズナギドリ、アナドリ。眼前に真っ青な海が広がっているのになんで私は炎天下で海鳥を追いかけてまわっているのかと自問する日々でした。趣味は調査のためという名目で始めたクライミング。なかなか上手くなりませんが、腕を磨いてどこにでも調査に行ける研究者になることが夢です。今年度よりバードリサーチの一員に加えていただきました。鳥屋としてはずいぶん偏った経験しかなく、まだまだ勉強不足なことがたくさんありますので、みなさんに色々教えていただければ幸いです。鳥ガールブームをおこしたいという野望(?)を抱いています。よろしくお願ひします。



笠原里恵

信州(中南信)生まれ。大学の学部時代は北陸地方で過ごし、修士課程で信州(北信)に戻りました。博士課程で関東地方に移住し、現在は埼玉県に住んでいます。学位論文では、河川の鳥類群集と増水との関わりについて研究しました。その際、河川の河道掘削が鳥類に与える影響評価を行う機会があり、人間活動と野生生物の折り合いについて考えるようになりました。折り合うことのできる点を見つける一環として、「身近な鳥のそもそもの基礎生態」や「人間の生活と鳥たちの利用環境との関係」に着目しながら、イカルチドリ、コチドリとインシギ、カワセミやヤマセミ、オオヨシキリ、モズなどの研究を行ってきました。最近はずズメ(たまにライチョウ)の研究にも携わっています。皆さんと一緒に調査や情報収集をすることで、色々な鳥の生活を明らかにし、人間活動と折り合う方法を模索していくことができたら嬉しいです。どうぞよろしくお願ひいたします。



バードリサーチニュース 2013年4月号 Vol.10 No.4

2013年4月25日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之 編集者: 青山夕貴子・高木憲太郎

表紙の写真: キビタキ